

2023年度（令和5年度） 幼保小中学びの接続カリキュラム開発校 実践報告（概要）

（1）今年度の市全体の取組【P1～】

* 連携・接続の充実にに向けた方向性

- ・ 定期的に連携協議会を実施し、子どもの学ぶ姿を共有（学期に1回以上）
- ・ 言葉と数を獲得する過程を踏まえたカリキュラムの編成・実施
- ・ 15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力を意識し、幼保小連携から幼保小中連携へ

* 合同研修会（6月）

- ・ 教育長講話「就学前と義務教育9年間の学びをつなぐ」
- ・ 今井教授講話「言葉と数への興味と直観的な感覚を育むために」

* 校長・主任研修

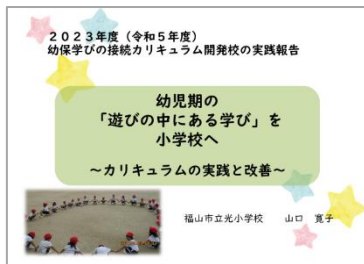
- ・ 第1回 何のために教科を学ぶのか ～改めて学習指導要領を読む～
- ・ 第2回 福山100NEN教育9th year「記号接地」

* 合同研修会（2月）

- ・ パイロット校区の実践発表 ～学びをつなぐカリキュラム開発の過程～
- ・ 朝倉淳名誉教授講話「一人一人の育ちと学びをつなぐカリキュラムの編成・改善」

（2）パイロット校区の取組【P4～】

* 光小【P4～】



1 はじめに

- ・ 幼保小連携体制
- ##### 2 幼保小でつながる学び
- ・ カリキュラムの編成→実施→改善過程
 - ・ 「あきとなかよし」柔軟な展開
- ##### 3 幼保小連携による変化
- ・ 園所で見られた変化
 - ・ たつじんテストの結果分析→保育授業改善
- ##### 4 おわりに

* 緑丘小【P10～】



1 学びがつながる交流

- ・ 交流園所・クラスの固定化
 - ・ 秋見つけ→秋のテーマパークでの交流
- ##### 2 言葉と数に関わる個の見取り
- ・ 言葉と生活経験をつなぐ
 - ・ 数の実態把握（1年生→他学年）
 - ・ 数の感覚を積み上げる場
- ##### 3 今年度の振り返り
- ・ 幼保小中連携へ

* 加茂小中【P16～】



1 はじめに

- ##### 2 弾力的な時間割の設定
- ・ 学校全体で共通理解
- ##### 3 ひと・もの・ことをつなぐカリキュラム
- ・ 「いきものとなかよし」合科的・関連的に
 - ・ 体験を通して言葉と数の獲得
- ##### 4 育ちと学びをつなぐ幼保小中連携
- ・ 連携協議会、保育・授業参観
 - ・ 中学生による読み聞かせ
- ##### 5 おわりに

※ 別紙

- ・ 「育ち」と「学び」をつなぐカリキュラム（光小学校区）
- ・ 学びをつなぐ人をつなぐカリキュラム（緑丘小学校区）
- ・ “ひと・もの・こと”をつないだカリキュラム（加茂小中学校区）
- ・ 幼保小中連携教育の推進状況

2023年度(令和5年度) 幼保小中学びの接続カリキュラム開発校 実践報告

目的

乳幼児期における自発的、創造的な遊びや体験を通じた育ちと学びを基礎としながら、すべての子どもたちが、安心感を持って小学校生活に円滑に移行し、自己を発揮し成長していくために、就学前教育と学校教育の連携・接続を進展させ、学びの連続性を確保する教育課程(カリキュラム)を開発・実践する。

(1) 今年度の市全体の取組

* 連携・接続の充実に向けた方向性 *

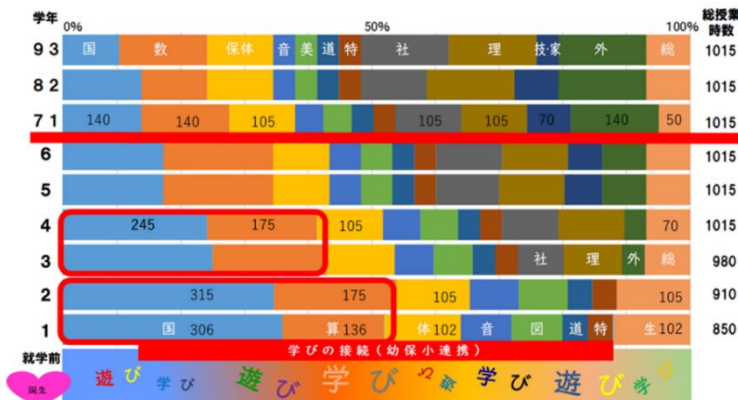
※ 8th year 基本的な考え方 (P6)

- ・ 定期的に連携協議会を実施し、子どもの学ぶ姿を共有(学期に1回以上)
- ・ 言葉と数を獲得する過程を踏まえたカリキュラムの編成・実施
- ・ 15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力を意識し、幼保小連携から幼保小中連携へ

* 合同研修会(6月) *

※ 7月指示・確認, 福山市HP

- ・ 教育長講話「就学前と義務教育9年間の学びをつなぐ」




小学校低学年の国語・算数は、総授業時数の半分を占める。

就学前から義務教育9年間で学びをつないでいく中心に「言葉」と「数」がある。

- ・ 今井教授講話「言葉と数への興味と直観的な感覚を育むために」

幼児期、児童期に何をしなければならぬのか

- ・ いつ使えるのかの直感を伴う「**生きた知識**」を子どもが学べるようにする
- ・ **問題解決の道筋がわかる直観**を育てる
- ・ 答えが**適切かがわかる直観**を育てる
- ・ **学びが楽しい、そこにおいて間違えや失敗は歓迎するべきもの**というマインドセットを育てる



「言葉」と「数」は、義務教育の教育課程において、非常に大事な役割を果たす基盤。

生活経験の中で、自分で育んだ言葉と数の知識や感覚が、どれだけ上手く教科の学習につながるか。このことが、学力が付くか付かないか、学びが楽しいか楽しくないか、ということに大きく影響する。

*** 校長・主任研修 ***

- ・ 第1回 何のために教科を学ぶのか ～改めて学習指導要領を読む～ ※ 12月指示・確認

〔日時〕 11月6・7・8日 14:30～16:30

〔目的〕 ・ 「言葉」と「数」が全ての教科の基盤であることを踏まえ、学習指導要領に立ち返り、教科を学ぶことへの理解を深める。

- ・ 自校の現在地(教材研究・校内研修・子ども主体の授業等)を確認し、更なる質的向上に向けた具体的な取組を明らかにする。

〔内容〕 ・ 教科担当指導主事による説明(5分×9教科)

- ・ 協議(校内→グループ→全体)

学習指導要領に立ち返り、自校の教材研究・子ども主体の授業等の改善に向けた取組について



〔受講者:各学校 校長1名・主任1名〕

- ・ 第2回 福山100NEN教育9th year「記号接地」 ※ 2月指示・確認



〔日時〕 2月1日 14:30～16:45

〔内容〕 今井先生 × 三好教育長

お二人の対話の中に、
8年間の取組のスライドや授業動画
を入れて、理論と実践を繋ぐ。

すべての概念が
直接 身体に接地していなくても
最初の手がかりとなる知識が
接地されていれば
どんどん知識を
増やしていくことができる

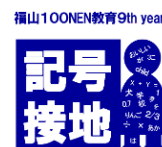
基本的な概念が
記号接地できていれば
そこから先は
抽象的な概念も
自分で学習できる

すべての施策を

「学び」一点に集中し、

一年一年試行錯誤を

積み重ねてきた今だからこそ…



「記号接地」は、福山100NEN教育として大切に取り組んできた「学び」「使える知識」など、すべてを説明できる言葉。まさに求める学力であり、求めてきた学び。



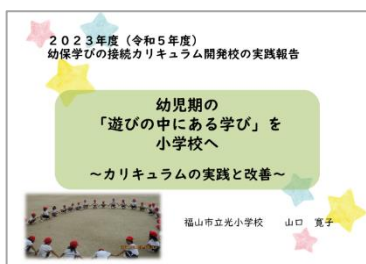
〔受講者:各学校 校長1名・主任1・2名〕

＊ 合同研修会(2月) ＊

・パイロット校区の実践発表 ～学びをつなぐカリキュラム開発の過程～

光小	霞小学校 西保育所 野上保育所 天使幼稚園 草戸こども園
緑丘小	緑丘幼稚園 福山りじょう幼稚園 ももやまこども園
加茂小・中	広瀬学園小学校 白ゆり幼稚園 広瀬保育所 ひまわり保育園 かも・なかよしこども園

〔光小〕



- ・ 幼保小でつながる学び
- ・ 幼保小連携による変化

〔緑丘小〕



- ・ 学びがつながる交流
- ・ 言葉と数に関わる個の見取り
- ・ 今年度の振り返り

〔加茂小中〕



- ・ 弾力的な時間割の設定
- ・ ひと・もの・ことをつなぐカリキュラム
- ・ 育ちと学びをつなぐ幼保小中連携

・ 朝倉淳名誉教授講話「一人一人の育ちと学びをつなぐカリキュラムの編成・改善」

1 子どもたち・私たちの現在地は？

1.1 コロナ禍前とは異なる子どもたち

《過去・現在・未来》

災害・コロナ禍で変容する体験・成長
 進化したデジタル化・生成AI
 「情報」の混乱とメディアリテラシー
 多様性を前提とする社会への移行
 災害・戦争・環境・政治・人口減少

-2-

2 「連携・接続」をどうつなぐか？

2.1 基本的な考え方として

① 特別ではなく当たり前
 指定の有無にかかわらず展開

② 一部ではなく全体に
 園所内、校内の全体に(全員に)
 市の全体に(すべての園所、校に)

③ 取組から成果に(持続可能な取組に)
 段差や垣根を低いままに

-6-

3 面白さ・楽しさ・喜びと柔らかさ！？

3.2 子どもを見る眼

特定のものさしで計測するのではなく

広い眼 集団・個人の中にある多様性
 長い眼 時間軸 変化・成長を続ける
 深い眼 背景 文脈 理由 思い 意味
 柔らかい眼 異なる視点・見方・捉え

子どもが「そうだ!」という前には、「思考」がある。その後に、「実行」する。そのプロセスが大事。
 緑丘小の発表によく表れていた。

光小は、計画になかった教科も関連させて、カリキュラムをより良いものに変更されていた。
 その柔らかさが大事。

加茂小中のように、中学校も一緒に取り組むことが大事。遊びは、子どもが問題を乗り越えて
 いく上で、強い動機になる。

福山市100NEN教育9年目のテーマが「記号接地」。

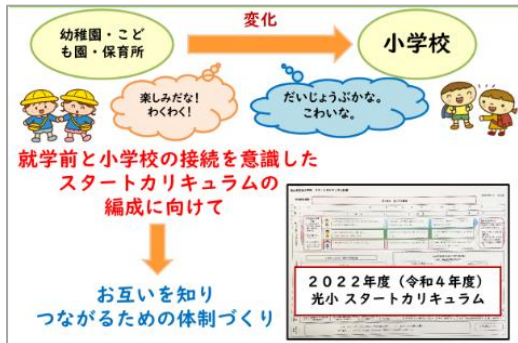
3校区とも、子どもたちが経験を使って、体験を通して、学んでいく
「接地」を大事にした取組になっている。



(2) パイロット校区の取組

* 光小学校区 *

1 はじめに



**霞学区・光学区
幼保小連携協議会**

<目的>
小学校と就学前が「育ちと学びをつなぐ」ための情報交換、交流を行い、実践する。

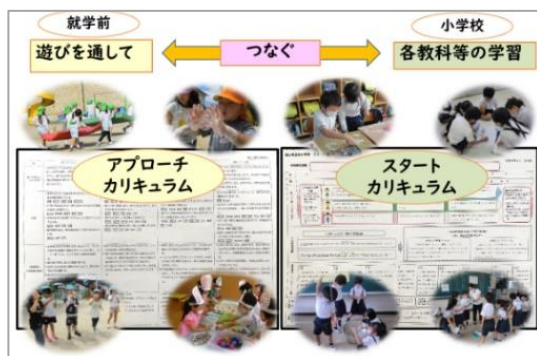
<構成>
霞小学校 西保育所
野上保育所
光小学校 草戸こども園
天使幼稚園

幼保小連携通信「ともに」

HPでの情報公開



2 幼保小でつながる学び



◇ 幼保小連携体制

小学校入学を迎える際、環境の変化は大きく、子どもたちは楽しい気持ちと不安な気持ちを抱えています。本校でも、安心して学校生活を始められるよう、生活だけでなく、子どもたちの学びをつないでいくために、校区でさらに幼保小連携が充実していく体制を整えていきました。

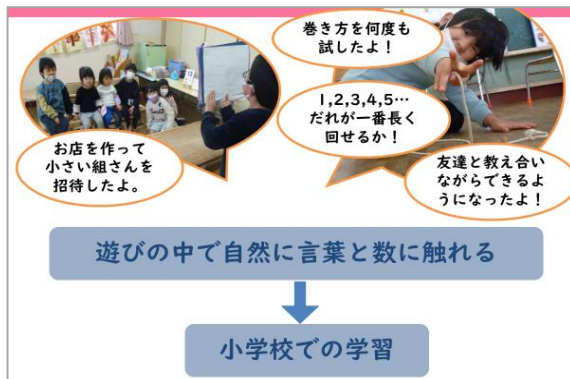
霞学区・光学区幼保小連携協議会は2小学校、4園・所で構成しています。小学校と就学前が「育ちと学びをつなぐ」ための情報交換、交流を行い、実践することを目的として、保育・授業参観後に子どもの学ぶ姿を共有しながら、学びをつなぐカリキュラム編成に向けた協議を行っています。協議会の内容は、連携通信やホームページなどで、各施設の職員や、保護者に公開しています。

就学前の子どもの学ぶ姿を知り、小学校へつないでいくために、年間継続して、「言葉や数に自然にふれる環境構成」「子どもが思考しながら活動できる支援」「子どもの育ちを次へ活かす研修」等、子どもの学びを促す支援や研修の在り方を協議しています。

協議会の中で、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」について、もっと知りたいという声上がり、連携校区で合同研修を行いました。各園所での様々な子どもの姿と照らし合わせながら、「10の姿」について話し、一人一人の発達異なることなど、幼児教育で大切にしていることを共有しました。

◇ カリキュラムの編成→実施→改善過程

園所で遊びを通して学んだことを小学校の各教科等の学習につなぐために、園所でのアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムを学びでつなぐ意識をもって、カリキュラムを編成していきました。編成したカリキュラムをもとに、実践を行っています。カリキュラムの編成では、とくに学びの基盤となる「言葉と数」を子どもたちが獲得していく過程を大事にしました。今年度は、実践で見えた子どもの姿からさらにカリキュラムを改善しているところです。



遊びの話題になり、「こま遊び」に興味を持ちました。「もっとコマを回せるようになりたい」という気持ちから、回し方・紐の巻き方を工夫したり、何度も挑戦し楽しむ姿、回すコツを言葉や身体を使って友だちに伝え合う姿などが見られました。このように、園所での遊びを通して、自然に言葉と数に触れながら学んでいる子どもの姿を連携協議会で共有し、小学校での学びにつなげています。

カリキュラムに表した生活科を軸とした総合的な単元は、園所での子どもの遊びや経験を踏まえ、設定しています。

園所では、子どもたちは毎日、興味を持った遊びや、生活体験とつながりのある遊びを楽しんでいます。例えば、泡遊び・シャボン玉遊びでは、より泡立つ方法を素手や道具を使って試したり、形が大きい・小さいことに気づいたりしていました。また、割れにくいシャボン玉を作るために、何を使ってどうするとよいかを考えたり、より大きなシャボン玉を作るために、吹く息の力を調整したりする姿がありました。

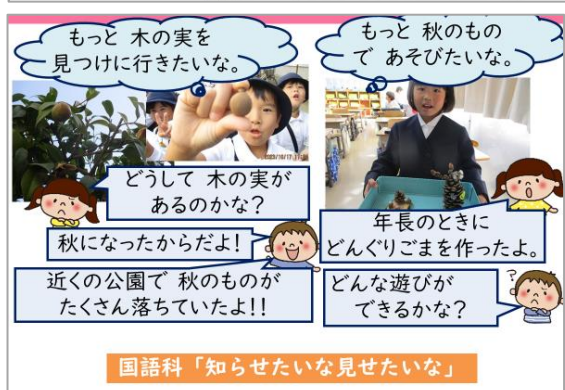
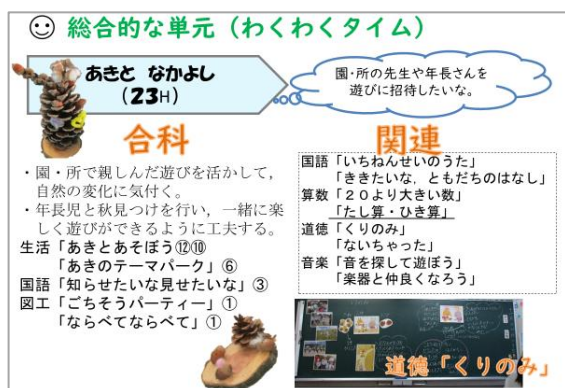
他にも、小さい組を招待して楽しんでもらいたいと、絵や言葉を使って紙芝居を作成し、喜んでもらえるように読み方を考える姿、自分が読もうとしたときに、意味がわからない言葉が出てくると、「〇〇って、何?」とお互いに言葉の意味を聞き合う姿も見られました。例えば、ある子が「正月って何?」と聞いたことから、正月

◇ 総合的な単元「あきとなかよし」柔軟な展開

2学期の「あきとなかよし」では、生活・国語・図工などを合科的に、算数・音楽・道徳などを関連させながら、総合的な単元を設定し、実施しました。授業での子どもの姿から計画にはなかった算数科「たし算・ひき算」も関連させていきました。

学習の始まりは、子どもの疑問からでした。

学校の中庭の木々の周りに、木の実が落ちていたのを発見し、「こんなのが落ちていたよ!」と、教室に持ってきました。子どもたちは、「え、なんの実なの?」「どんぐりかな?」「柿の種じゃない?」と、集まり始めました。教室の本棚から図鑑を持ってきて自然と調べ始めました。「この実は、樺の実だったよ!」「もっと探したい!」という思いから、まずは、中庭で木の実を探しました。木の実を見つけ、上を見上げると、木に実がなっていることに気がきました。生活ルームの材料と合わせて、まつぼっくりのクリスマスツリーなど拾った木の実でのおもちゃ作

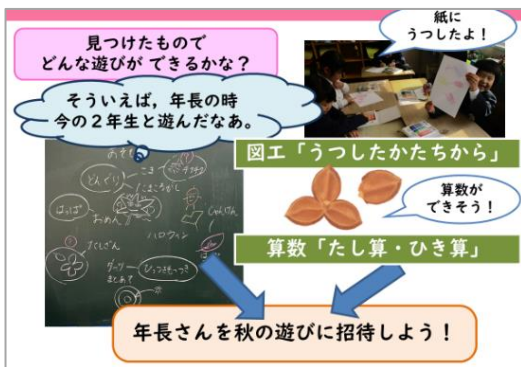


りが始まりました。活動を振り返る中で、「もっと、木の実を見つけに行きたい」「木の実ができたのは、秋になったから」「公園で秋のものを見つけた」「もっと秋のもので遊びたい」「どんぐりごまを作ったことがある」などと、季節が変わってきていることや、今までに遊んできた経験を語り始めました。このことが、国語科「知らせたいな見せたいな」の学習につながっていきました。



また、畑にふうせんかずらの実がなっていることに気づき、教室へ持ち帰りました。実が何個あるか10ずつに分けて数えていました。そこから算数科「20より大きい数」の学習へつながっていきました。

近くの公園に秋見つけに行ったときも、子どもたちは、見つけたものでどんな活動ができるか考えました。話し合う中で、自分たちが年長の時、今の2年生と一緒に遊んだ経験や、園・所で遊んできた経験を出し合いました。



木の実のこすりだしから、図画工作の「うつしたかたちから」と関連させたり、ツバキの実で「算数ができそう」という発言から、算数科「たし算・ひき算」とも関連させていきました。生活科での学びを、他教科へとつなげながら、秋の遊びに年長さんを招待したいという単元のゴールを子どもたちと設定していきました。

年長児を招待する前に、「一緒に秋見つけをしたい」「作った松ぼっくりけん玉やどんぐりごまで遊んでほしい」「観察文を伝えたい」という子どもの思いがありました。そこで、校区の園所と連携を取り、交流できる活動を考えていきました。



野上保育所とは、一緒に公園に秋見つけに行きました。草戸こども園とは、松ぼっくりで作ったけん玉やどんぐりごまで遊びの交流をし、天使幼稚園へは、観察文のプレゼントを贈りました。園・所の子どもたちから、「もう名前を覚えてよ。また遊ぼうね」という言葉をもらい、「秋のあそびランド」は充実していきました。



秋のあそびランドは、2年生の学習ともつながっています。2年生は、生活科「つくるたのしさ 発見」で、手作りのおもちゃを作りました。国語科「馬のおもちゃの作り方」での、うごくおもちゃの説明文とも関連させながら、1組は、「スマイルランド」2組は「おもちゃワールド」と、作ったおもちゃで遊ぶ活動に、1年生を招待してもらいました。

1年生は、この活動に刺激を受け、「自分たちも招待をしたい!」「作った遊びで遊んでほしい!」と、あそびランドの計画につながっていきました。「スタンプラリーがあったらいいね」「景品もあると、うれしいよ」と、どんどん工夫していき、年長さんを招待して、「楽しい!」「いろいろな遊びがあってすごい!」などの言葉をもらいました。交流を通して年長さんは、「どんぐりで人形劇をしていたから、今度は自分たちも絵本で紙芝居をつくりたい」という思いを持つようになりました。



霞小学校では、11月に西保育所を招待して「秋祭り」を行いました。1年生の児童は、遊び方をわかりやすく説明したり、優しい言い方に変えたりして、丁寧に関わる姿がありました。また、頼りにされていることに喜びを感じ、責任感を持つことにもつながりました。

園児は、「楽しかった」「うれしかった」などの感想を1年生に伝えて、自分の思いを表現する姿につながりました。小学生の姿から刺激を受けた年長さんは、「楽しい遊びがいっぱいだった」「早く小学校へ行きたいと思った」と振り返ったようです。所での生活の中でも、「小学校」というワードが増えたようです。また、小学校への道のりの関心を持ち、地図づくりにも広がり、年下児へと教える姿があったようです。

秋のあそびランドで、自然に親しみ、遊びを工夫した子どもたちは、3学期が始まって観察池が凍っていることに気付きました。そして、冬も生活科ルームから自分で選んだ容器を持って氷をつくる実験がはじまりました。「保育所でも作ったときは、陰に置いたよ」「花びらを入れたら、かわいいね」「明日の朝凍っているかも!」と、氷を作るために準備しました。しかし、次の日の朝は凍りませんでした。「なんで凍らなかったの?」「0度より低くならないと凍らないよ」と、知っている知識を出し合いながら、「ずっと陰のところはどこだろう」「大きい入れ物だと、氷も大きくなるかな」と、試していきました。寒波の日、やっと氷になり、手で触って冷たさを感じ、「分厚い氷になったよ」「つめたいね」など、言葉で伝え合っていました。

3 幼保小連携による変化



◇ 園所で見られた変化

幼保小連携をしていく中で様々な変化がありました。

草戸こども園は、10月、園児が小学校の教室や、図書室・理科室などの雰囲気などを1年生と見学しました。小学校のイメージを持つことができ、園の絵本に、「小学校ではっけん!」の特集があると、「学校の机ってひとりずつにあったよ」「図書室には本がたくさんあったよ」など、学校の感想を話す姿が見られたそうです。小学校への見通しが持てたことで安心して入学へと繋げていくことができるという意見もありました。

学校のお兄さん・お姉さんたちと関わる中で、園に戻ってから、自分たちがしてもらったことを、年下のクラスのお友だちにもしたいと言って、お昼寝後のお友だちを優しく声をかけて起こしたり、お布団をたたむのを手伝ったり、服を着せるのを手伝ったりする姿が見られるようになったようです。

連携する前は小学校へ対して壁があるように感じていたが、お互いに参観する中で、園・所の先生から、「聞きたいことが聞けるようになり、小学校の先生とつながりを持てた」との意見がありました。

3 幼保小連携による変化 天使幼稚園

幼保の変化（幼保の先生）



単なる教え込み
→子どもが考える



論理的な思考→言葉の力



天使幼稚園では、子どもたちに「教え込む」ことだけに集中することをやめ、答えを示すのではなく「どうすればいいのか」を考えられるよう、視覚化していく試みをされています。例えば、食育で「この野菜は栄養となります」ということを絵だけで伝えるのではなく、水槽に野菜を浮かべて子どもが考えるようにしています。水に浮く野菜と沈む野菜があることから、理科の実験のように、土の中で育つ野菜と土の上で育つ野菜に気づくきっかけを作り、目で見て考えるように設定されています。

ます。生活の中で身近なものについて関心を高める取組が行われています。

連携を通して、「体験を通して考えることのできる環境を整えることが重要課題である」と考えています。子どもは経験したことから、論理的に思考し、それを伝えるために言葉の力が育まれることから、園・所でも、子どもの経験を増やすためのカリキュラムを編成しています。



小学校の先生の変化

～「学びの基盤に関する調査」を活用～

1年国語

積み上げるって
どういうこと？



積むでもいいんじゃないかな？

身体を使って
言葉の意味を考える

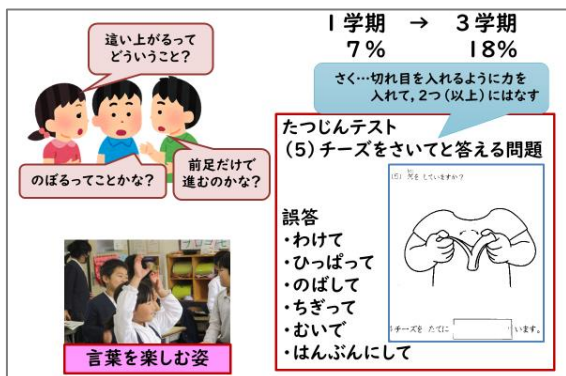
他教科との関連

カレンダーで
時間言葉に触れる

◇ たつじんテストの結果分析から保育授業改善

言葉と数について、昨年度からたつじんテストを実施し、連携協議会で結果を分析して、つまずきの要因を探り、保育・授業で大切にすることを考えています。今年の上学期に行った調査結果では、時間を表す言葉や動作を表す言葉に課題がありました。保育・授業の中で、子どもたちが対話したり体験したりしながら、言葉と数に触れる場を作ろうと再確認しました。


小学校では、教師が言葉にこだわり、「積み上げるってどういうこと？やってみて？」「積むでもいいんじゃないの？」などと、似ている言葉と比べたり、体で表現したりしながら、言葉について考える場を設定しました。生活科では、交流活動を行う日までのカレンダーを掲示し、「交流まであと何日」「何日前までに準備しよう」など、時間言葉に触れたり、意識できるようにしました。国語の時間に、「はい上がる」という言葉が出てきたとき、子どもから、「はい上がるってどういうこと？」「のぼるってこと？」という発言があり、そこから意味を確かめていきました。言葉について話し合ったり、動作化したりすることを通して、言葉を楽しむ姿が見られます。



たつじんテストの結果からも、「チーズをさいて」と答える問題において、正答は少ないですが、なんとかして言葉で伝えようと、「わけて」「ひっぱって」「むいで」などという言葉が見られました。

小学校の先生の変化
～「学びの基盤に関する調査」を活用～

2年生 教室環境



時間に関する言葉に
こだわる

時間ことばの正答率
(1) 1週間後を答える
48%→74%
(2) 1週間前を答える
38%→56%
(3) 1週間先を答える
46%→67%

2年生も、毎月のカレンダーを教室に掲示しています。行事や子どもの誕生日を書き、何日後には何があるという対話を繰り返す中で、時間を表す言葉に触れています。3学期に再度調査を行うと、たつじんテストの空間・時間言葉の問題で、「1週間後」「1週間前」「1週間先」を答えられる子が増えています。

調査から見られた子どもの状況を意識して授業に取り組む中で、職員間で子どもが発する言葉に関する話題が増えてきました。

4 おわりに

連携に取り組む中で、アンケートなどの機会を通して、保護者の方の思いをきくことも大切にしています。

このように取り組んできましたが、連携をさらに充実していくために、協議会をどのような内容にしていくのか、まだまだ手探りの状態です。今後も、子どもたちの姿を共有しながら、より連携を深め、この間の幼保小連携の取組を、中学校へつなげていくことを全教職員で考えていきます。

保護者アンケート



小学校生活が始まるにあたり、いきなり勉強中心になるのではと不安に思っていたが、あそびタイムなどの時間が設けられていて安心しました。子ども自身も、教室以外の場所に行き、クラスを越えて新しい友達ができ喜んでいました。

小学校にすんなりとなじむことができました。学校での様子も教えてくれます。先生や上級生たちがやさしく接してくれたからだと思います。

なじみのある保育所の先生と関わったことが、うれしかった様子でした。何度も「先生が来た」と言っていて、本人のやる気やがんばりにもつながっていると思います。

*** 緑丘小学校区 ***

1 学びがつながる交流

昨年度（パイロット校事業1年目）の課題

- ① 幼保小の子どもの交流や学びのつながりが十分ではなかった
- ② 言葉と数の獲得に関わる分析が個の分析や他学年を巻き込んだものになっていなかった

◇ 昨年度の課題

この昨年度の反省を踏まえ、今年度の幼保小連携に関わる取組と課題について、

- ① 学びがつながる交流
- ② 言葉と数の獲得に関わる個の見取り
- ③ 今年度の振り返り の3点について説明します。



緑丘小学校は、緑丘幼稚園、ももやまこども園、福山りじょう幼稚園の3つの園を中心に連携を行っています。各園の特徴を踏まえたアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムを作成し、遊びや体験を通した育ちと学びをつなぐために、交流のねらい等を連携協議会で協議し、教職員自身がつながって考えています。昨年度、幼保と交流する際、交流するクラスと園所について見通しをもたずに、とにかく都合が合う日に交流を行ってしまいました。当然、交流をしたときに、子ども同士もその場限りの関わりになってしまい、職員同士も交流の反省を次に生かすことができなかったという課題が残りました。

◇ 交流園所・クラスの固定化

そこで、今年度は、人も学びもつながるように、意図的に交流クラス・園所を固定してみました。そうすることで、小学校と園所の担任が、交流に関して、前回の反省を生かし、子どもの学びがつながるように打ち合わせや相談ができるようになりました。

さらに、小学校と園所の担任それぞれの特技を生かせるよう、TIとしての進进行を役割分担しました。例えば、花を咲かそうプロジェクトで、球根を植える場面では小学校の担任がTI、その後の鬼ごっこをする場面では幼稚園の担任がTIとなり、園での鬼ごっこをつなげ、子どもたちが興味関心をもてるようにしていきました。





◇ 授業づくりの相談

また交流クラスの担任同士だけでなく、連携協議会で、小学校の授業づくりで困っていることも気軽に相談できるようになりました。例えば、「今度、生活科で土遊び・水遊びをするんですけど、今まで幼稚園やこども園でどんなことをしていましたか?」と相談すると、「雨どいをいろんな長さに切って置いておくだけで、いろんな遊びを考えよう」「ビニールシートに水を流すと、子どもたちが思いっきり遊んでいたよ」と具体的な遊びを一緒に考えてくださったり「こんな新聞があるから参考にしてみてください」と、資料を持って来てくださったりしました。

これらのアドバイスを生かして活動をする時、子どもたちが思い思いに遊んでいました。一人で黙々とペットボトルの穴から出てくる水の流れに興味をもって遊んでいる子、土の山から道を作って水を流してみるけど、水の勢いで道が崩れてしまうのをどうしたら防げるか試行錯誤している子、雨どいを使ってどうすれば水を上手に流せるのか考えている子と、興味関心は様々

でしたが、それぞれが遊びに没頭していました。雨どいの重なりを考えて、水が流れるために試行錯誤しながら本気で考えていく中での発見は、きっと本人の中に記憶されるだろうし、中学年からの理科の学習にもつながっていくと思います。

体育の表現遊びでも環境づくりについてアドバイスをもらい、自然と体が動かしたくなる活動へとつながりました。



◇ 秋見つけ→秋のテーマパークでの交流



2学期にはたくさんの幼保小の交流がありました。秋見つけから秋のテーマパークでの児童と園児の様子の一部を紹介します。

幼稚園では、今年度、クラスと園が固定されたことで、園児と児童の距離はどんどん縮まり、互いに安心感をもって、自分の思いを伝え合うことができるようになりました。1年生と一緒に、秋見つけに行

った後、園児は早速拾った自然物を使った遊びや制作を始めました。教室に置いてあった絵本や子ども自身がイメージする物をもとに、数日にわたって様々な物を作りました。次第に保育室に完成品が増えていき、ある日一人の園児が「そうだ!いろいろな遊び場や物があるどんぐり遊園地ランドを作ろうよ」とみんなに提案しました。表現遊びで1年生に招待状をもらったことを思い出し、「じゃあ、小学校の人たちがくれた招待状を自分たちも作って、ぱんだ組さんやりす組さんを招待しようよ!」と話が進み、どんぐり遊園地ランドに向けての活動が始まりました。1年生から招待状をもらった嬉しい経験から、招待したい気持ちを絵で表現したり、1年生の招待状みたいに先生に教えてもらいながら言葉で表現したりしていました。



1年生との交流に刺激を受け、園児のやってみてみたいという知的好奇心が掻き立てられる様子が見られました。1年生からどんぐり秋ランドの招待状が手渡され、後日、ワクワクしながら行くと、そこには秋の自然物を使ったゲームコーナーがたくさんありました。児童のお店紹介が終わると、園児たちは走って気になるゲームコーナーに行き

ました。それぞれのコーナーでは、児童から遊び方の説明があり、園児たちはすぐに理解して楽しく遊んでいました。

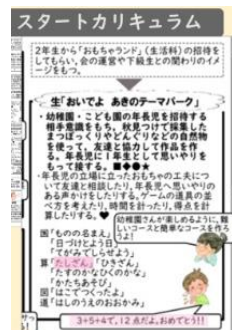
どんぐり秋ランドが終わり、園に戻った園児たちは感想を交流しましたが、1人の園児は、ゲームコーナーにあった的当てがとても楽しかったようで、記憶を頼りに割り箸で鉄砲を作り始めました。途中何度も悩んでいましたが、時間をかけ見事に作り上げました。完成した物をじっくり見ていると「お兄ちゃんみたいにはならなかったんよ。あんなの作ってみたいかったな」と気持ちを高めていました。1年生との継続した交流を通して、保育者や園での友だちから受けるものとはまた違う刺激を受け、言葉や数の獲得の素地を遊びの中で培っています。



1年生も交流を重ねるごとに、年長さんに「手紙を書きたい」「招待状を送ろう」「名前を書いて送りたい」など相手を意識した自発的な手紙のやり取りを行うようになりました。

また、それぞれの交流の後に絵日記を書いてみると、書くことに苦手意識をもっている児童も、すらすらと年長さんと関わったことについて書いて

います。子どもたちにとって、心が躍るようなワクワクした経験があれば、こんなにも抵抗感なく書けるのだと毎回驚かされます。さらに、交流をする中で、年長児さんがわかるようなルールや説明にするにはどんな言葉を使えばいいのか考えていました。リハーサルで、どんぐりボウリンググループがルール説明のときに「得点をたします」と言うと、他のグループの子が、「『たします』ってわからんのかな」とアドバイスしていました。すると、「あ～そうか」「あわせるは？」「わかる？」「手を付けたらどう？」とたし算で学んだことを思い



出して、わかりやすくするにはどう説明したらいいのか考えていました。

どんぐりボウリングを作っていたグループは、自分たちでルールを考え、ボウリングのピン代わりにペットボトルに得点を書いていました。「100万点にしようや。」「じゃあこっちは70点」その会話を聞いたときに、スタートカリキュラムが頭に浮かびました。「これって3本倒したらどうするん？」と問いかけると「たし算をして、得点が高い方がたくさん景品がもらえます。」「じゃあ、100万点と70点と50点倒したら？」と聞くと、「わあ、無理じゃ」「点数考えようや!」「幼稚園さんも100万点とかわからんじゃろ!」

と言い、1桁の点数に変えていました。自分たちが計算できるように得点を考えることで、遊びの中で3つの数のたし算ができていました。ただただ交流をすればよい、一緒に遊べばよいのではなく、交流からどんなことをそれぞれが学ぶのかねらいをもったり、学びをつないだりすることが大切だと考えています。

2 言葉と数の獲得に関わる個の見取り

小学校の子どもたちの言葉と数の獲得についてです。言葉と数について意識して授業をしてみると、子どもたちが理解していないということを、私たちは理解せず授業をしてきていたと痛感しています。

◇ 言葉と生活経験をつなぐ

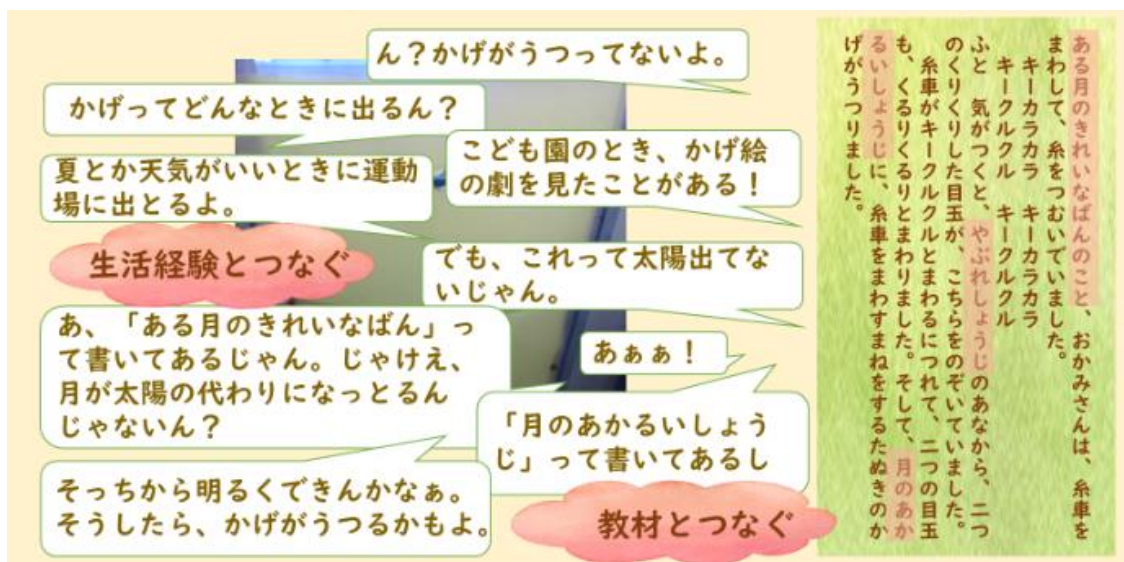
これは、1年国語科教材「おむすびころりん」の一文です。

私たち大人は挿絵もあり、文を読むとその情景がすぐ浮かんできます。授業で「とびこんだ」の言葉を子どもたちが自分たちの言葉で語った様子です。

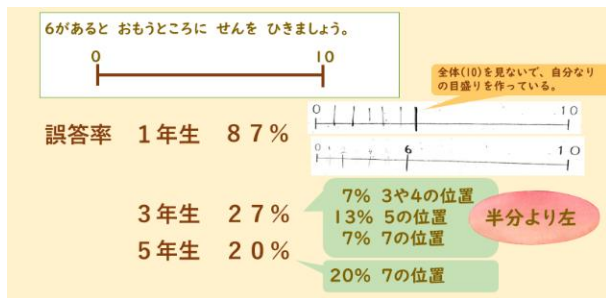


次々に、自分たちの言葉で「とびこんだ」の解釈を伝え合い、意味を理解していきました。

もう一つ、「たぬきの糸車」での様子です。子どもたちの「やぶれしょうじって何？」という疑問から、教室と廊下の中のドアに模造紙を挟み、破れ障子を再現してみました。タヌキ役の子が廊下に出て、破れ障子からのぞきながら糸車をまわす真似をしていました。「かげがうつってないよ。」という子どものつぶやきから、次のような対話が始まりました。



実際にライトで照らしてみると、糸車を回している真似をしている児童の姿がうつり、子どもたちから歓声があがりました。子どもたちが事象と生活経験とをつなぎ、さらに教材に戻って読んでいく姿が見られました。

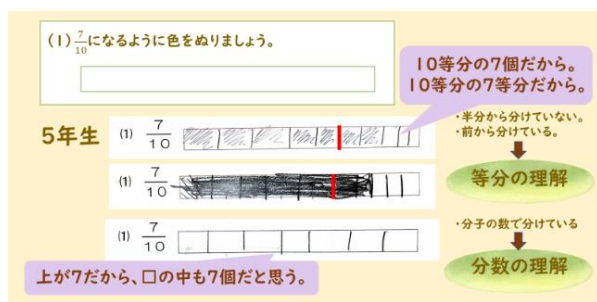


◇ 数の実態把握(1年生→他学年)

今回、慶應義塾大学の今井先生が開発された「まなびワクワクテスト」の結果から、本校の課題だと感じた問題の分析を行ったことについて説明します。

1年生で実施したとき、この問題の誤答が多いことに驚きました。間違えている児童のほとんどは、目盛りを書いていなかったり、全体を見ないで、前から順番に自分なりの目盛りを書いてしまったりしていました。

学年が上がれば、この問題はできるようになるのか、高学年ではどのくらい正答率があるのだろうと気になりました。そこで、3年生と5年生に同じ問題を解いてもらうと、誤答率が3年生27%、5年生20%と、かなり数値は下がるものの、3年生でも半分以下の位置に印をしている児童が20%いて、5年生でも5人に1人の児童が量感をつかめていない結果となりました。



この原因は何か、この子たちは「決められたものの長さを等分に分けられていないのでは?」「分数の理解はどのようなだろう」と思い、さらに分数の問題を追加して取り組んでみました。追加の問題では、5年生において、先ほどの問題を間違えていた子の半分以上が、このように解答していました。理由として、「10等分の7個だから」と答えており、

分数の意味としては正しいのです。しかし、私たちがこのテープ図を10等分するときには、まずは半分に分けると思うのですが、このテープ図の中心となる5の位置、つまり半分の位置は、赤線部分になっているのです。つまり前から適当に区切っていき、最後調整していています。また、ある児童は、「上(分子)が7だから」と理由を書いており、分数の理解ができていません。特に学年が上がるにつれて、様々な教科で難しさを感じている児童が増えてきます。早い時期につまずきに気付いて、少しでも救うことができたかと考えています。

◇ 数の感覚を積み上げる場

5年生の分数の問題の結果を受け、1年生でその感覚を何か少しでも積み上げられることはないかと考えました。

今、生活科で紙コップを切り開いて風車を作っています。「試しに8この羽を同じ幅で作ってみて」と言うと、その場にいたほとんどの子が紙コップを端から順番に切り始め、最後には「あれ、数が多くな



なった」とか「太さが全然違うわ」と言っていました。「どうしたらいいのかな」と問いかけると、ある男の子が、「先生、ペンがあればできそうな気がする」と言い、ペンでコップの口部分の円の直径上に点の印をつけ、半分、半分と印をつけていきました。それを見ていた他の子は、「すごい!」「もう1回やってみよう」「ペンがなくてもできそうじゃない?」「できた!」「もっと分けられそう」とワクワクしながら作っていました。

また、遊びの中で数に触れていく機会も作りたいと思い、数のカードゲームを作って取り組んだり、教科書にあるすごろくゲームに取り組んだりしています。時間に余裕のある1年生、低学年だからこそ、数や量の感覚に触れる時間をたっぷり取りたいと思っています。

3 今年度(パイロット校事業2年目)の振り返り



◇ 幼保小中連携へ

就学前と小学校1年生の学びをつなぐことを意識した連携を重ね、子どもたちの経験を活かす保育・授業、カリキュラムを考えてきました。

しかし、この考え方は、架け橋期の年長児や1年生のみの話ではなく、幼保から1年生、小学校6年間そして中学生につないでいくことが大切であるにもかかわらず、そこに広げていくことができていないことが本校の課題だと感じています。

できることからと思い、2月のはじめに行った中学校区の研修では、幼保小中連携で取り組んでいることを中学校の先生方と共有しました。また先日、中学校区の校長・主任会があり、まずはお互いの授業を見合う仕組みをつくって

こうという話をしています。そのときには、小中学校の各教科の学習指導要領を整理した「何のために教科を学ぶのか」の資料を活用しながら、国語科であれば、子どもたちは本当に読めているのか、算数・数学科であれば、もとになる数の理解はできているのか、日々の授業の中での子どもの状況を見て、語り合う場をつくっていきたいと考えています。

多くの職員が学びをつなぐという視点で教育活動を行い、子どもたちが日々の学びを深めていけるよう、今後、どのように幼保小中連携を進めていくのかを本校の課題として考えていきます。



* 加茂小・中学校区 *

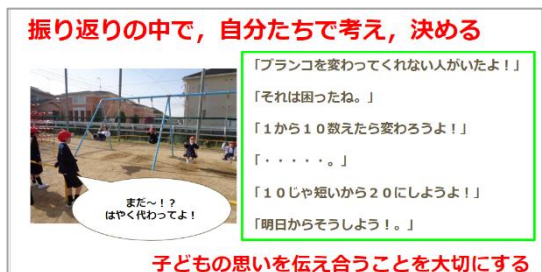
1 はじめに

加茂小学校では、以前から保育・授業参観をし、教育活動の交流してきました。その中で、園所で子どもたちが生き生きと遊びを楽しんだり、遊びの中で友だちと試行錯誤したりする姿を目の当たりにし、この学びが幼保小中とつながるよう取組を進めています。

2 弾力的な時間割の設定



を自由に楽しめるようにしました。8時30分頃からは、教室に戻り、朝の会をした後、自由遊びタイムの振り返りを行いました。振り返り後のクラスタイムでは、学級ごとに友だちと触れ合う活動や、毎週金曜日は、大人数でやってみたいことを子どもから聞き、学年での活動を取り入れました。この取組について、学校全体で共通理解を図っていたので、1時間目に1年生が体育館や運動場、図書館等を自由に使うことができた。



ないことが話題になりました。この問題を解決するために、子どもたちから意見がロク々に出てきました。出てきた様々な意見をまとめようとする子もいました。話し合いの途中、「10では短すぎる!」と言った子に、「たしかに…」と黙り込み、みんなで考える姿が印象的でした。最後には、20まで数えたら変わることに決まりました。

次の日、ブランコのそばでは20まで数える元気な声が聞こえてきました。しかし、すぐに新たな問題が発生しました。学級の中で決めたルールだったので、今度は「他のクラスの子が守ってくれない!」という声が出ました。「どうしようか」と問い返すと、「他の学級にもルールを伝えてみよう!」ということになりました。その後、他の学級の理解を得られて、ブランコ問題はなくなりました。このように振り返りで、子どもたちが思いを伝え合うことを大切にしていくと、困ったことが起きても、自分たちで考え、決めて解決していく子どもたちの姿が見られるようになりました。この他にも、なかよしタイムを設けたことで、遊びの中で言葉や数を学んでいる様子を見ることができました。例えば、人数を数える、チームに分かれる、同じ数のグループを作るなど、たくさん数を使っていて、そこから授業を考えることができました。

◇ 学校全体で共通理解

連携で見えた子どもの姿から、今年度、新たに弾力的な時間割を考えていきました。1年生は、登校後から約1時間を「なかよしタイム」とし、幼児期に親しんでいた遊びを自由に楽しむ時間としました。

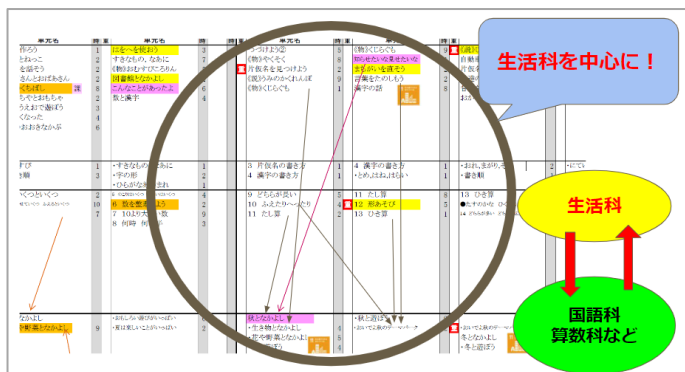
「なかよしタイム」は3つの内容で構成しています。登校後から8時30分までは「自由遊びタイム」です。登校後、運動場、図書館、教室の好きな場所で、思い思いの遊び

◇ 自分たちで考え決めて解決していく子どもの姿

保育参観をしたとき、いろんなタイミングで子どもたちが振り返りをしている場面を見ました。遊びで楽しかったこと、嬉しかったことを伝え合ったり、困ったことを伝え、解決しようと意見を出し合ったりしていました。

なかよしタイムの中でも、同じように振り返りをしていると、ある朝、一番人気のブランコで、なかなか変わってくれ

3 ひと・もの・ことをつなぐカリキュラム



このような子どもたちの姿から、生活科を中心に合科的・関連的なカリキュラムについて考えていきました。生活科での活動や経験を、国語科や算数科で活用したり、習ったことを生活科で生かすなど、相互につながるよう意識しました。例えば、生活科の「いきものとなかよし」では、「生き物を探して飼育し観察したり調べたりして生き物に親しみをもつ」というねらいから、1学期の学習内容や、子どもたちの興味関心、もっている知識や経験を生かして学ぶためには、どの教科のどの単元と合科的・関連的に授業を行うとよいかを考えていきました。

2学期 9月～ **生活科「いきものとなかよし」**

単元目標 「生き物を探して飼育し観察したり調べたりして生き物に親しみをもつ。」

「観察した生き物の動きや形を言葉や体で表現して友達と伝え合ったり、形や足の数などを数えたり分類したりしたことを絵と文で表す。」

+

国語科「しらせたいな、見せたいな」
算数科「どちらがながい」
図工科「のってみたいな、いきたいな」
体育科「表現遊び」

たり分類したりしたことを絵と文で表す」という活動を予想し、国語、算数、図工、体育を合科的・関連的にできるのではないかと考えていきました。

◇ 「いきものとなかよし」国語、算数、図工、体育を合科的・関連的に

生活科「いきものとなかよし」 **国語科「しらせたいな、見せたいな」**

楽しみに観察

また、卵産んでる！
 前より大きくなってよ！
 目の色がもう朝なのに黒いな～！
 本当だ～！

知らせたい！ 早く見せたい！

図鑑でもっと詳しく調べよう。
 トノサマバッタはバッタの中で一番ジャンプするよ。100メートルも飛ぶんだって！
 100メートルって？どのくらい？
 先生と調べたら、運動場の大玉松からうんていの辺までだったよ！
 トノサマバッタは、脱皮をして大きくなるよ。
 冬眠はしないんだって。寒いと死んでしまうんだって。

どの冊で書いたら分かりやすいかな。
様々な会話が聞こえてきます

教室で飼育活動が始まると、子どもたちは飼っている生き物に興味関心をもち、毎日観察するのを楽しみにしていました。虫の変化や新たな発見を伝え合い、飼育している生き物を通して対話していました。生き物が苦手な子もいました。その友だちに何とか好きになってもらうためにはどうしたらよいか試行錯誤する姿もありました。発見したことをみんなに伝えようと、紙に書いて貼る姿もありました。

子どもたちの「知らせたい」という気持ちから、国語科「しらせたいな、見せたいな」の学習が始まりました。この単元を合科的に扱ったことで、時間の確保ができ、じっくり観察したり図鑑等で調べる時間をとることもできました。1学期に国語で勉強した「くちばし」の

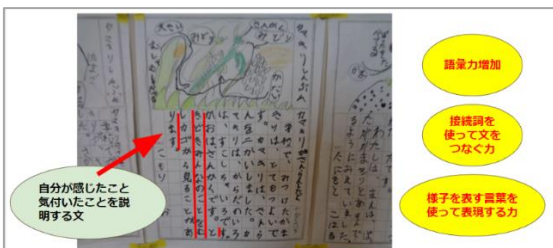
学習と同じように、文章は説明する順序が大切だということを思い出しながら書いていました。活動をしていく中で、自然と「お家の人にも知らせたい」という思いになり、新聞にまとめることになりました。

同じ虫を書いている友だちのそばに行き、気付いたことを話し合いながら書いたり、図書館に図鑑を取りに行ったり、飼育箱を机の上に置いて実物を見ながら書いたりなど思い思いに活動していきました。虫のことを書くにはカタカナを使います。カタカナを習い始めたばかりの子どもたちでしたが、図鑑を読むために教科書を出してカタカナを調べたり、友だちに聞いたり、必死に読んだり書いたりしていました。

教室の中に用意したたくさんの図鑑は、子どもたちにとって、調べるためのものというよりも、体験したことを確認するための図鑑であるようにも見えました。難しい言葉で書いてあっても、飼育を通して知っていることがあるので、書かれてあることをイメージしやすいようでした。かまきりの卵の中には、黄色く細長い卵が約200個綺麗に並んでいることも、図鑑を通して知りました。目に見えないことの不思議を解決してくれる図鑑は、子どもたちの学習活動において欠かせないものでした。



また、観察中にザリガニが脱皮することがありました。最初は、ザリガニの子どもが生まれて2匹になったと思う子が多くいましたが、目の前で起きたその事象について友だちと対話したり、調べたりする中で、今回は脱皮という現象で、「脱皮とは体の皮を脱いで大きくなること」「脱皮直後は皮が柔らかく弱りやすいこと」などを知っていきました。脱皮はザリガニだけでなく、体が硬い昆虫も脱皮をして大きくなることも知りました。目の前でカマキリが逆さになって卵を産卵する様子から「産卵」という言葉も覚えました。体験を通して、どんどん新しい言葉を知っていきました。



◇ 体験を通して言葉と数の獲得

いきものの観察をするときには、算数科「どちらがながい」での経験が生きていました。この単元では、持っているものさしを使おうとしてもはかりにくかったり比べにくかったものを、他のものを使って比べると便利であることを活動を通して学びました。

この算数での学びを生かして、子どもたちは、なんとかしていもむしの長さを調べようとしていました。いもむしを触るのは少し怖い、直接はかるのは可哀そうという思いから、いもむしがいた所に印をつけてそこを紙テープではかたり、前に見つけたいもむしが、消しゴムのより短かったのも、同じ消しゴムを使ってどのくらい長いかわべてみようとする姿も見られました。

学校の生き物を見たことのないお家の人に、自分たちが飼っている生き物の素晴らしさを知ってもらうために、一生懸命調べ、観察し、絵や文を工夫していきました。お家の人に知らせるという目的をもったことで、子どもの書きたい意欲はどんどん高まりました。

完成した新聞には、調べて分かったことだけでなく、活動を通して自分の感じたことや気付いたことも書いていました。この新聞には「ときどきみんなのことを虫かごからみるがあります。」と書いてあります。

他にも、「卵から元気な赤ちゃんが生まれてきてほしい」「おしりを振りながら泡を出していた」「卵のかたまりが2つあるから1つから200匹くらい生まれてくるから400匹生まれてくるはずだ」など、体験を通したからこそその気付きを自分の言葉で表現していました。また、接続詞を使って文を繋いだり、様子を表す言葉を使って文を書いたりする姿が見られました。



新聞を書くことを通して、体験したことやそこでの気づきを、絵や文で表現することに楽しさを感じたり、書くことに自信をもったりする子どもの姿がありました。出来上がった自分の新聞に満足する子が多くいました。完成した新聞は、友だちと交流し、廊下に掲示しました。友だちの新聞を見ながら質問をしたり、友だちの新聞に刺激を受け、さらに良いものを書きたいという思いを持つ子もいました。単元が終わった後も、新聞の用紙を準備しておく、休憩時間に友だちと楽しみながら書く子たちがいました。



子どもたちの学びはどんどんつながっていきます。図画工作科「のってみたい な 行きたいな」で子どもたちが描いた絵に、学校で飼っている生き物を描いた子が多くいました。生活科での観察を活かし、足の数や色、形などを間違えないように描いたり、生き物の特徴を図鑑やタブレットで調べて描いたりする子もいました。カマキリの世界に自分も入りたいという思いをもって想像を膨らませている子もいて、友だちと対話しながら、絵に表そうとする姿がありました。



体育の表現遊びでも、子どもたちがなりたいと言ったのは、身近にいるカマキリやトカゲ、ダンゴムシ、か

たつむり、バッタでした。日頃から観察していることもあり、なぜそのような動きにしたのかを見たことから説明していました。

生「いきもの なかよし」

- ・生き物を探して生き物を飼育し、観察したり調べたりして、生き物に親しみをもつ。■◆
- ・観察した動きや形を言葉や体で表現したり、足の数を数えたり分類したりする。●★

国「うみのかくれんぼ」
「しらせたいな みせたいな」
「まちがいをなおそう」
算「10よりおおいかず」
「どちらがながい」「ふえたりへったり」
体「表現あそび」
道「げんきてねあげはくん」

かまきりの頭の形は三角でかっこいいなあ。

このような授業での取組をカリキュラムとしてまとめていきました。昨年のパイロット校のカリキュラムを参考にしながら、生活科を中心に、合科・関連させる教科を整理していきました。

環境構成には、4月の取組「なかよしタイム」や年間を通して意識したいことをかきました。家庭との連携や、幼保小の子どもとの交流、小中の児童生徒の交流、職員間の交流のなど、幼保小中連携の計画も記しています。

4 育ちと学びをつなぐ幼保小中連携

幼保小中連携協議会



年に6回の連携協議会

参加者

- ・就学前施設4園の担当者
- ・小学校校長
- ・1年担任
- ・中学校の連携担当教諭

子ども育ちや学びをつないでいくための協議会

幼保小中連携協議会の在り方 実践交流



小中学校、各園所で、取り組んでいることや子どもの様子を交流

学びのつながり 園所のつながり 教育活動に生かす

所の横のつながりにも変化がありました。他の園での取組を知ることで、刺激を受けたり、小学校で一緒になることを見通して、年長児同士が交流をもつこともできました。実践交流は、互いに教育活動を計画する上で大切な情報になりました。

◇ 幼保小中連携協議会での実践交流

加茂中学校区では、幼保小中の職員で連携協議会を年6回実施し、子どもの育ちや学びをつなぐために協議を重ねてきました。

協議会の主な内容は、

- ・スタートカリキュラムの編成や再編、確認
- ・実践交流
- ・保育参観、授業参観の事後研修
- ・児童、生徒間交流の打ち合わせ の4点です。

また、今年度は、全員が目的をもって参加できるように、毎回、実践交流を行いました。実践交流を行うようになったことで、昨年度よりも、具体的に園所の取組について把握することができ、活動のつながりや内容を見直すことができました。互いの取組を交流することで、園

◇ 幼保小中保育・授業参観

今年度は、保育・授業参観も6回実施しました。幼保小中の教職員がお互いの施設を行き来し、子どもの学ぶ姿を交流しました。

保育・授業参観では、参観の視点を全職員で共有しました。学校の基本理念「ひと、もの、ことをつないだ教育活動を進め、感謝・感動・思いやり」を意識し、幼児期から小中学校までの学びをつなぐという視点をもって参観しました。本校がつないでいきたい学びは、学力の基盤となる言葉と数の獲得に向けて、対話的・体験的な学び、そして児童生徒の興味関心、もっている知識や経験を生かす学びです。どのようにつないでいくのかを具体的に考えながら参観しています。

参観後は、観察だけでは見とれない授業者の意識や意図的な関わりについて質問をしたり、意見を交流したりしました。互いの子どもの姿を見て交流することで、子どもの育ちや学びをつないでいくために、何ができるのか、何を実践すべきか具体的に話し合うことができました。

幼保小中連携協議会の在り方 保育・授業参観



保育参観：全職員で就学前施設4園へ（夏季休業中・冬季休業中の2回）

小学校授業参観：（4月、6月、11月の3回）

中学校授業参観：（7月）

★参観の視点★

つないでいく学び

- ・学力の基盤となる言葉と数の獲得に向けて、対話的・体験的に学ぶ。
- ・児童生徒の興味関心、もっている知識や経験を生かして学ぶ。

ひと

- ・教師（保育士）と子どもの関わり、子ども同士の関わり

もの

- ・環境設定 ・子どもが自発的、自主的に選べる環境づくり
- ・一人一人が安心して過ごせる環境の工夫

こと

- ・活動内容、体験的な活動

事後研修会



園長

小学校教諭

幼稚園教諭

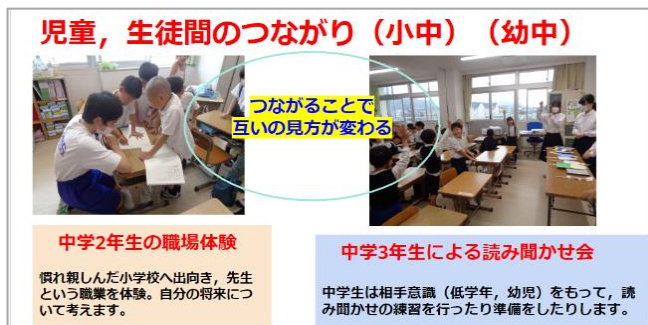
中学校校長

中学校教諭

中学校ではどんな取り組みとして生かされるか

小学校ではこの学びと育ちをどのようにつないでいくか

◇ 幼保小中交流 ～中学生による絵本の読み聞かせ～



子ども同士の交流も幼小中で行っています。中学3年生による低学年への読み聞かせの会は何年も前から続いている小中連携の取組です。今年、連携協議会の中で、幼稚園にも読み聞かせの会を行うことが決まり、中学生が幼稚園にも行きました。中学生が手作りのペーパーサートを用意して絵本を読んだり、低学年を意

識したクイズを出したりしたことで、子どもたちは大喜びし、中学生に対して憧れの念も、もったようでした。幼保小中で連携協議会を実施したことで、新たな取組を生み出すことができました。

◇ 今後に向けて

学期末には、保育・授業参観を通して得た気づきを、自分の学年ではどのように生かされるのかを具体的に話し合い、全体で交流したり、学びをつなぐカリキュラムについて共通理解を図る研修を行いました。中学校の先生も一緒に、加茂中学校区として義務教育の終わり15歳までに身に付けておいてもらいたい力を再確認し、意識統一を図っています。このように取組を進めていますが、課題もあります。

- ・ 中学校の教員は、幼保の保育参観に参加しても、発達段階に大きな差があり、生徒に繋げていくというイメージがもちにくいこと。
- ・ 小学校での授業は、対話的・体験的な授業が多く、中学校の授業とギャップがあること。
- ・ 小学校の授業で出来ても、中学校ではできないという意識の壁が教員にあること。
- ・ 個の交流は図れているが、授業について交流する機会が少なく、共通理解が図れていないこと。

などです。「何を目的に任せる授業をしているか。なぜ言葉にこだわった授業づくりをしているのか。」と、子どもの姿で対話を重ねていく必要があると感じています。

5 おわりに

子どもたちは、幼児期に、たくさん力を育んでいます。知識や経験の差も大きくありますが、わからないことがあれば、自然に友だちのところへ行って話し合ったり、友だちの話に関心をもって聞いたりする子どもたちの姿が見られます。わからないことを「わからないから教えて!」という姿がたくさんありました。このような子どもたちの育ちをつなぐために、私たちは教材と深く向き合い、子どもたちが自然にもつ問いや疑問、気づき、「どうして?」「知りたい!」という思いから授業をつくっていきたいです。そして、子どもたちのもっている知識や経験を生かして学び合うことのできる活動や子ども同士の対話が深まり、失敗しながらも試行錯誤できるような体験を大切にしたいカリキュラムを編成していきます。

最後に、子どもの育ちを理解し、幼児期の学びをつないでいくために、幼保小中が歩み寄ってお互いの取組を理解することの大切さを改めて実感しています。めざす子ども像に向けて、互いにできることを真剣に話し合ったことで、新しい取組に挑戦することができました。私たちも、子どもたちが幼児期に培ってきた力をさらに成長していくために、教材と深く向き合うことができました。学ぶことを楽しみに入学してくる子どもたちばかりです。その子どもたちの思いを汲んだ学びの場であるために、学力の基盤となる言葉と数の獲得に向けて、対話的・体験的に学ぶ、子ども主体の授業づくりをこれからもめざしていきます。



2023年度（令和5年度）幼保小中学びの接続カリキュラム開発校 実践報告（概要）

（1）今年度の市全体の取組【P1～】

* 連携・接続の充実に向けた方向性

- ・ 定期的に連携協議会を実施し、子どもの学ぶ姿を共有（学期に1回以上）
- ・ 言葉と数を獲得する過程を踏まえたカリキュラムの編成・実施
- ・ 15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力を意識し、幼保小連携から幼保小中連携へ

* 合同研修会（6月）

- ・ 教育長講話「就学前と義務教育9年間の学びをつなぐ」
- ・ 今井教授講話「言葉と数への興味と直観的な感覚を育むために」

* 校長・主任研修

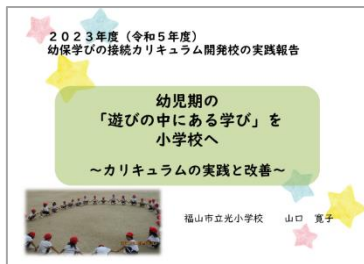
- ・ 第1回 何のために教科を学ぶのか ～改めて学習指導要領を読む～
- ・ 第2回 福山100NEN教育9th year「記号接地」

* 合同研修会（2月）

- ・ パイロット校区の実践発表 ～学びをつなぐカリキュラム開発の過程～
- ・ 朝倉淳名誉教授講話「一人一人の育ちと学びをつなぐカリキュラムの編成・改善」

（2）パイロット校区の取組【P4～】

* 光小【P4～】



1 はじめに

- ・ 幼保小連携体制
- ##### 2 幼保小でつながる学び
- ・ カリキュラムの編成→実施→改善過程
 - ・ 「あきとなかよし」柔軟な展開
- ##### 3 幼保小連携による変化
- ・ 園所で見られた変化
 - ・ たつじんテストの結果分析→保育授業改善
- ##### 4 おわりに

* 緑丘小【P10～】



1 学びがつながる交流

- ・ 交流園所・クラスの固定化
 - ・ 秋見つけ→秋のテーマパークでの交流
- ##### 2 言葉と数に関わる個の見取り
- ・ 言葉と生活経験をつなぐ
 - ・ 数の実態把握（1年生→他学年）
 - ・ 数の感覚を積み上げる場
- ##### 3 今年度の振り返り
- ・ 幼保小中連携へ

* 加茂小中【P16～】



1 はじめに

- ##### 2 弾力的な時間割の設定
- ・ 学校全体で共通理解
- ##### 3 ひと・もの・ことをつなぐカリキュラム
- ・ 「いきものとなかよし」合科的・関連的に
 - ・ 体験を通して言葉と数の獲得
- ##### 4 育ちと学びをつなぐ幼保小中連携
- ・ 連携協議会、保育・授業参観
 - ・ 中学生による読み聞かせ
- ##### 5 おわりに

※ 別紙

- ・ 「育ち」と「学び」をつなぐカリキュラム（光小学校区）
- ・ 学びをつなぐ人をつなぐカリキュラム（緑丘小学校区）
- ・ “ひと・もの・こと”をつないだカリキュラム（加茂小中学校区）
- ・ 幼保小中連携教育の推進状況